

研修旅行の作り方 <その3>

野菜コースの研修旅行の事例

本稿では国際耕種が受託実施している JICA 筑波野菜栽培技術関連コース(以下、野菜コース)が訪問している見学先について、そのいくつかを具体的に紹介する。

野菜コースのカリキュラムは、およそ実習 60%、講義 25%、見学 15%という割合で構成されており、全体からみた見学の割合は低いものの、9 ヶ月という比較的長期の研修コースであることから、複数回の研修旅行や日帰り見学を組み合わせ、研修目的を網羅することができるのが特徴的である。また研修期間中であっても研修員の要望や必要性に応じて、見学先を柔軟に調整することができる利点もある。

野菜コースでは栽培農家を多く訪問する。農家見学では、各科野菜の栽培技術の実際と実践を学べるだけでなく、その農家の作型や営農計画、経営やリスク管理の考え方など、各々に興味深い話を聞くことができる。主に研修員の質問に農家が答える形式でインタビューが進むことから、事前に農家に対する質問を用意しておくよう、研修員に働きかけておく効果的である。見学先である農家を探す際には、産地の農協や普及所に協力をお願いすると信頼できる方を紹介していただけることが多い。

また近年は直売所中心に出荷する少量多品目栽培農家、有機栽培農家、法人経営を営む農家など、農家のあり方も多様である。こういった多様な営農形態を学ぶことは研修員にとって有意義である。一方、こういった見学先の場合、学ぶべきことは、栽培技術なのか、マーケティングや営農の考え方なのか、現在の営農形態に至るまでの背景なのか、見学の趣旨をあらかじめ見学先、研修員とより具体的に共有して置くことが重要である。こういった見学先は農協や普及所を通じて探すのは難しく、研修旅行の作り手独自の情報収集が必要となる。



加工トマト栽培農家を訪問：加工トマト圃場を視察した後、営農方針についてインタビューする研修員

野菜コースの研修員は、ほとんどが自国の試験場職員か普及員であることから、日本の試験場や普及センターを訪問し、その役割や具体的な業務を学ぶことは価値のある経験となる。加えて、現場のニーズを如何に試験研究に活かしているかなど、試験場と普及センターとの連携体制は「自分たちの国が見做わなければいけないこと」として、高い評価が得られている。

日本の農業を学ぶにあたり、農協は重要な見学先である。日本の総合農協や産地は高いレベルで完成されたシステムであり、研修員にとって、自分たちが目指す未来の姿を描くヒントや今後の活動の刺激となることが期待される。加えて、野菜コースでは農協の営農センターで、ベテラン職員から農協の成り立ちや産地化の歴史を聞く機会を設けている。農家出身である職員さんが子供だった頃、仲買人が直接庭先に来て安い値段で野菜を買い付けていく話から始まるストーリーは、大いに研修員の共感を産む。その後、父親が仲間とトラックを借りて、直接市場に生産物を出荷するようになったこと、自身が農協に就職した時は、毎日遅くまで手書きの伝票とソロバンで共同出荷の利益分配の計算をしていたことなどは、農協の発展を支えた裏話として、研修員の興味を誘う。こういった話は誰にでもできるわけではなく、縁があって出会えた語り部を大切にすることもまた質の高い研修旅行を作る財産である。

上記に加え、直売所を独自のネットワークで繋ぐ農産物販売法人や農産物の安全性確保を担う行政体制、伝統野菜の取組みや 6 次産業化やアグリツーリズムを担う婦人グループ、JGAP 農場など、様々な興味深い見学先を新たに加えてきた。新規の見学先は、コースに新しい知見をもたらしてくれる一方、期待した知見が思ったように得られないこともある。その際は、見学先にこちらの要望がうまく伝わっていなかったのか、研修員にこちらの意図がうまく伝わっていなかったのか、見学先自体が研修員の興味と合っていないのか、原因を検証し、次回以降へ活かすことを常に心がけている。

このように野菜コースでは、長年の見学先を大切にしながらも、研修スキームの目的、研修員のニーズや要望を踏まえ、見学先は毎年見直している。こういった試行錯誤こそが、よりよい研修旅行を作り上げるために必要であると考えます。